
黒邪の啼哭（聖安戦記 外伝）

亜薇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒邪の啼哭（聖安戦記 外伝）

【Nコード】

N5325BA

【作者名】

亜薇

【あらすじ】

愛する者を奪われた時、慈悲深き神は恐るべき脅威へと変貌する。天帝の御子として生まれながら「この世を破滅に導く邪神になる」と予言された黒龍・鵜。しかしそんな宿命にもかかわらず、誰よりも純粹で美しい心を持つ優しい神に成長し、父母神や他の神々に疎まれながらも穏やかに暮らしていた。ある時兄の月とともに、魔物の襲撃や終わらぬ戦乱に苦しむ力弱き人間たちを救うため、自らの力を与えた神巫女たちを創造する。やがて鵜は、月の創造した「奈雷」に恋い焦がれるようになるが……！（主人公麗蘭の最大の

敵、黒龍の過去編。イメージイラストを何点が展示しています)

設定・登場人物紹介（前書き）

本編の敵、黒龍を主人公とした外伝です。

本編序章である「荒国に蘭」よりも数千年前の昔から、物語ははじまります。

外伝ですが本編からほとんど独立している話なので、本編を読んでいなくても支障ないと思われます。

設定・登場人物紹介

鵄ぬえ《黒龍神》

天子でありながら『黒神』に為ると予言されたため、神々からも人間からも不吉とされ畏怖される。

人界を憂い、自らの力を与え神巫女『闇龍』を創る。

月ゆえ《聖龍神》

鵄の双子の兄で、次代の天帝と定められた御子。

不遇な弟を思い、共に宿命に抗おうとする。

神巫女『光龍』を創る。

琉羅るろ《闇龍》

黒の神力を纏う神巫女で、鵄を主とする。

茗帝国の皇女として生まれ、皇帝である兄の補佐として政務を行っている。

奈雷なれ《光龍》

白の神力を纏う神巫女で、月を主とする。

祥岐王国の貧しい農村に生まれ孤児となり、過酷な少女時代を過ごしてきた。

翠すい《邪龍》

天帝と女神新羅女の息子。

神格を奪われ、異形の姿に変えられた上、地上に追放された。

天帝と天妃、そして異母兄である月を憎んでいる。

序

遙か、神代

天に地に

禍神と呼ばれし鵜鳥の

響き渡るは「黒邪こくやの啼哭ていこく」

序

天地開闢かいびやくより数万年、天上界は天帝「神王しんおう」治世下。

天上の中心に聳そびえ立つ、神々が集う神王の居宮「陽凰宮ようおうきゅう」黎明殿れいめいでんの地下に、華やかな表の天界から隔離され陰に追いやられた、幼い神に与えられし「夜明宮やめいきゅう」が在った。

その宮の主は「黒龍神こくりゅうしん」、名を鵜ぬえ。神王の双子の天子の片割れだった。その神名に相応ふさわしい、黒い髪に黒い瞳を持つ見目麗しい御子だったという。

>
i
3
9
0
8
5
—
4
8
4
8
<

序（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

「荒国に蘭」で敵として登場した黒龍の過去編になります。
心優しき神が「邪神」へと変貌する過程を描きます。

1 (前書き)

麗しの兄弟登場。

天宮の地下深くに位置する夜明宮。

此処は、天帝によって神々が立ち入ることを禁じられた区域だった。

宮の主である鵄ぬえと、その双子の兄である月ゆえを除いては

「鵄。」

鵄は兄の呼び掛けに、読んでいた書物を机に置いて立ち上がった。

「兄さん、久し振り。」

向かい合った二人の少年の姿は、髪と双眸の色を除けばまるで鏡に映したかのように似ていた。

彼らは双神であり、天帝「神王」と天妃「神女しんにょ」の二人の天子。

鵄を訪ねて来た兄は「聖龍神せいりゅうしん」、名を月といい、神王によって次の天帝と定められた銀の髪の御子である。

「また書物に耽っていたのか。この前来た時よりも増えているな。」

「まあ他にすることも無いからね。」

部屋を見回す兄に、鵄は苦笑して見せた。積み上げられた幾つもの書物の山が、決して広くはない部屋のあちこちにある。

「最後に兄さんが訪ねて来てくれた時から大分経ったけど…天帝陛下や天妃陛下はお変わらない？」

鵄は父や母を「陛下」と呼ぶ。兄のように「父上」「母上」と呼

ぶことを禁じられているから。

「…お変わりない。相変わらずだ。」

鵜は「大分時間が経った」と言ったが、月にとっては大した時間には思えなかった。月の記憶が間違っていなければ、確かまだほんの2、3年しか経っていないはずだ。

永遠の時を生きる神族にとっては、時等とるに足らぬもの。鵜のような感覚の持ち主は、彼らの中では希少であった。永き時を一人でこの天宮の地下に住むことを強いられた鵜だから、多少の感じ方の違いは致し方の無いことだ。

「来てくれてありがとうね、兄さん。さ、座って。」

鵜は嬉しそうに微笑んで兄に席を勧めた。釣られて普段は固い月の顔も綻び、短く礼を言って鵜の向いに腰を下ろす。

この兄弟は、姿形は見紛ってしまう程良く似ているが、性格や、雰囲気は似ても似付かなかった。月の方は常に冷静で、他人の前ではほとんど表情を崩さない。対して鵜は、表情が豊かで子供らしく、素直で純粋な神だった。

「まだ人界に降りたりしているのか？」

「うん、まあね。」

神が無闇に人界に降りるのは禁じられていた。鵜も初めは恐る恐る降りていたが、人間たちに干渉しなければとくにお咎めも無いようなので、寂しいこの宮を時々抜け出しては、人界に降りるようになっていた。

鵜は人界が好きだった。人間たちを、人界の空を、大地を、生き

物たちを愛していた。その点においても鵄はかなり珍しい神だったといえよう。人界は神界を崇め、隷属する存在。余程の物好きでなければ、神は人界に降りてみよう等ということを考えたりはしなかったのだ。

月は、そんな弟が好きだった。

「荒廃が至る所で目に付く。天災が、飢饉が、戦争が、溢れている。」

人界創世から数えてまだ数千年。天地の均衡はしっかりとしたものではなく、魔界からの魔物の侵入や、暮らしを脅かす天変地異も絶えないという。

鵄は俯いた。しかし、瞳は強固だった。

「僕、最近ずっと考えてるんだ。何か出来ることは無いかって…何か、彼らのためにしてあげたい。こんな僕にでも何かが出来るのなら…」

月は、鵄に分からぬようそつと溜息をついた。

鵄が案ずる人間たち以上に、不幸だったのは鵄自身の方だ。

双神として生まれた月と鵄は、引き裂かれて何百年間も一度も会うことなく別々の場所で過ごしていた。同じ天帝の息子でありながら、二人の境遇は全く異なっていた。

片や次代の天帝、片や破滅を導く忌むべき子。

この世の理、天の王たる神王が、鵄を厭^{いと}った。即ち、鵄がこの世

界でたった一人になつてしまったことを意味する。

鵜が厭われた理由は、鵜と月が生まれ出づる時のたった一つの「さきみ先見」にあつた。

生れ落ちる双神は、次なる天帝となるべき銀の皇子と、

神王陛下の御世を脅かす悪しき黒の皇子である。

「先見」の予見は絶対で、必ず実現するという。

しかし月は、鵜が他のどの神よりも優しく、その心の美しいことを知っていた。そんな先見は、到底信じられなかった。

鵜の宮を出て、地上へ続く長い階段を独り上りながら、月は不遇な彼に何かしてやれないかと思つた。しかし此れはいつものことで、良い方法が思い付いた試し等無い。月に出来ることと言えば、父の目を忍んで時折弟を訪ねてやること位なのだ。

鵠は人界に降りた。

訪れたのは、戦乱が続く国の、荒れ果てた村の一つ。

男は子供から老人に至るまで戦いに駆り出され、家畜は既に食べ尽くされて、残っていたのは女たちだけだった。

路上に生えた雑草を齧^{かじ}り、乾いた土を口にする少女たち。此处はまだましな方だ。鵠はいつだったか、女たちが自分の赤ん坊を焼き殺し平らげていた村に行ったこともある。

鵠は人間が好きだった。彼らを心底美しいと思っていた。短い生を、それぞれが精一杯生き抜いていたから。

けれどこのような村にいるのは、美しさを失ってしまった人間だった。鵠は、それが彼らの所為^{せい}ではないことを知っていた。

彼らが窮状にいるのは、天上で見て見ぬ振りをしながら胡坐^{あぐら}をかいて座っている神々の所為に他ならない。

確かに、戦争は人間が醜い欲望をぶつけ合って起きたものに違いない。だが神々にはそれを摘み取る力も、有り余る時間もあり、そうするべきだった。にも関わらずそれをしようしないのは、人間たちをいつまでも天上界の下に置き、隷属させようという天帝の意思からだ。

天帝は、そもそも自分を崇める存在欲しさに人間を創造した。人々は天の絶対的な力に平伏し、天に救いを求める。しかし、天は何もしない。見ているだけだ。

鵜のように考えている神は、他にも多少はいたかもしれない。それでも何も事態が良くならないのは、天帝が「不必要」に人界に神が干渉するのを禁じていたからだ。

たとえ鵜が戦争で死んだこの女たちの夫や父、兄や弟を一人残らず生き返らせたとして、この戦争を進めている一部の人間を戒め止めさせたとして、無意味だろう。荒廃は既に人界中で目に付き、此れからも広がっていく。

ふと彼の目に、人気の無い道の真ん中でしゃがみこんでいる一人の少女がとまった。幼い少女は小さな黒い猫を撫でてやりながら頻りに泣いていた。猫は死んでしまっているようだ。

鵜は少女に近づき、しゃがんで優しく話し掛けた。

「かしてごらん。」

少女は涙を拭い、不思議そうに鵜を見てから、腕の中の猫を鵜に渡した。

彼はそれを受け取ると、猫の額に指を当てた。間もなく猫は再び息をし始め、金色の眼を開いた。

「生き返った！」

神族にとつては死んだ生き物に再び生命を与えるなど、造作もない。人間であっても、首が斬られているか、心臓が潰されているかでなければ生き返らせることが可能だ。

鵜から猫を渡されると、少女は驚きと喜びの声を上げた。撫でてやると、猫はくすぐったそうに鳴いている。

嬉しそうな少女に、鵜は見入った。少女の輝きを取り戻した顔は正しく彼が見たかったもの。

後ろから少女を呼ぶ女性の声がして、彼は我に返った。そして自分の行いを後悔した。

少女は振り返って、猫を抱いたまま女性の元へ走っていく。目の前の黒い髪の少年が猫を生き返らせたと聞き、女性の顔はみるみるうちに真っ青になった。

「お赦し下さい！」

女性は跪き、鵜に向かって頭を地に着けた。

「黒龍神さまとお見受けします。この子は…娘はまだ何も判らないのです。どうかお赦し下さいませ…」

きょとんとしている娘を庇うように、母親は懇願する。鵜は溜息をついた。そして少女に微笑んで、静かにその場を立ち去った。

村を出て更に歩くと、小さな神殿に行き着いた。人の気配がしないことに安心して中に入っていく。

「凄い…」

鵜は思わず感嘆した。神殿の中は思ったよりも広く、左右には高い天井へと伸びた白柱が立ち並び、奥へと続いている。柱の奥の壁は、一面が壁画で覆われていた。

長く続き過ぎている戦乱で、もはや神に縋ろうとする人々の姿すら無い。神官さえ居なくなってしまった神殿の寂しさが、却って一層荘厳さを醸し出しているかのようだ。

奥へ歩いて行くと、主神として祭られているのは天帝、神王。美しく威厳に満ちた巨大な石像は、鵜が知っている父とは似ても似付かなかった。

自分たちが畏れ、敬愛する天帝が、実は己の享樂に耽り人間の事など露程にも考えていない男であることを知ったら、彼らはどう思うのだろう。

鵜は父の石像に積もっていた埃を手で払いながら、苦笑した。

再び歩き出すと、彼は壁画を一つ一つ見て行った。

ほとんどが天帝や兄聖龍神のもので、魔物を討伐する闘神から天界でも有名な美神まで様々な神々が美しく描かれていたが、やはり鵜のものは無かった。在ったとしても、他の神のように輝かしい存在としては描かれてはいまい。

自分のものが無いことに寧ろ安堵しながら、彼は最後の絵の前に立った。その絵を見た途端、他の絵とは確かに違うものを感じた。

描かれていたのは山となって大地を埋め尽くす無数の屍、全てを焼き払うかのような真つ赤な焰、立ち込める黒い煙。そして、全て

の中心に立つのは黒い髪に黒い瞳の血塗れちまみの神。

彼は直ぐに気付いた。それが紛れもない自分自身だということに。

黒い髪に黒い瞳の神など、彼以外には存在しない。

それに、絵の中で彼にそっくりな聖龍神が、剣を抜いて彼に對していたのだから。

絵の右下には、小さな字で「非天と天子」、「黒神こくじんと銀神」とある。

その「鵠」は、ぞつとする程冷たい笑みを浮かべていた。

鵠は、後に此れが先見の予見であることを知る。

生まれ落ちる双神は、次なる天帝となるべき銀の皇子と、神王陛下の御世を脅かす悪しき黒の皇子である。

自分が実の父母に忌み嫌われ、神々だけでなく、人間たちにも恐れられる理由であるこの先見の言には、続きが在った。

互いに、殺し合うべき宿しゆくにあり。

あの神殿壁画こそが、鵠と月の予言された未来の姿だったのだ。

2 (後書き)

神が神殿に行き、像を見て「似てないな」と感じる。
こっぴうシチュエーションが好きです、何故か。

1 (前書き)

鵜と月は成長し、青年になってます。
外見年齢18歳くらいの設定。

高く青く晴れ渡る空の下、双神たちは剣を交合させていた。
何千年かの時を経、彼らは青年の姿に成長していた。

「鵜、もっとどんどん打って来い！遠慮しなくて良いぞ！」

月は弟の剣を受けてやりながら言った。

「厳しいなあ、兄さんは…遠慮なんかしてないのに。」

鵜は笑って、月の隙を見つけようとする。

既に天界随一の剣の使い手となっていた月は、時折鵜を宮の外に連れ出して相手をしてやっていた。神王と神女の仲が更に険悪になっ
ていき、二人とも天宮を留守にすることが多くなったので可能にな
ったことだ。

鵜は月とは違い、剣術をはじめ人から何も教わることが出来な
ったので、兄の心遣いが本当に嬉しかった。そして、あの薄暗い宮
から出られるように配慮してくれることにも感謝していた。

長くすらりと伸びた手足を駆使して、兄の剣を受け止め隙をつい
て攻めていく。重なり合う剣と剣の音が、晴天に響く。

「よしっ！」

兄が少し身を引いた瞬間、鵜が突きを繰り出した。狙いは兄に剣
を落とさせること。

強めの突きを軽やかに避け、月がもらったとばかりに笑む。

「あ、しまった！」

気付いた時にはもう遅く、生まれた死角から反対に鵜が剣を落とされてしまった。

月の剣先が鵜の首筋に触れ、勝負はあった。

「参りました。…あーあ、また負けちゃったよ…」

少し悔しそうな顔をする鵜に微笑んで、投げてあった鞘に剣を納める。

正直、たった数回稽古をつけただけなのに、鵜の上達振りは凄まじい。

本人は気付いているのか謎だが、たまに怖い位良い反応を示してくる。

兄に倣い鵜も剣を納めると、芝生の上に腰を下ろす。

天界は美しい。幾世紀経とうと、碧い空に豊かな大地が広がり、神々も決して老いることなく美しい姿のままだ。天帝下の闘神たちの守護もあり、争いも無いに等しい。時折彼らが邪の神を討伐することもあるが、失敗は無い。直ぐ片が付き、神々は討伐のこと等忘れてしまう。

「相変わらず人界に下りているのか？あちらの様子はどうか？」

「…此処数百年で落ち着くどこるかますます酷くなっているよ。」

あの日、泣いている少女と出会った日。あの日のことは未だに誰にも話していない。

あの時彼は人間たちが、自分のことを恐ろしい存在だと認識しているという事実を知った。そして敬愛する兄と剣を交えて殺し合うという未来を描いた忌々しい絵のことも、あれ以来頭に焼き付いて離れなかった。

「ねえ、兄さん。僕たちで何か出来ることは無いのかな？」

自分が人間たちに恐れられていると知っても、鵜は相変わらず彼らを憂いていた。優越感を得たいがためだとか、偽善だとか、そんな感情からでは決してない。彼はただ純粹に、人間のために何かをしてやりたいと願っている。

「人間を襲っている魔物たちだけでも…何とか出来ないかな？天界の討伐軍では数が少なすぎるし、人間たちも人間同士の戦でそちらに手が回っていない状況だ。」

元より、神族は人界に関心が無い。天帝からの命でも無ければ、進んで人界に行くような闘神は滅多にいない。

「天帝陛下は…やはり人間のことにについてはお考えが及ばないのかな？」

月は頷く。

「…寧ろ人界が惨状にある方が、人間の信仰心は高まるからな。具体的に、何かを為さるうとは思っていないだろう。」

というより、頻繁に顔を合わせる月でさえ此処何百年か、天帝がまともに政務を行う姿をほとんど見ていない。天界が至って平穏ということもあるが、天帝はこと有る毎に月を代理に立て、公衆の目

の前に現れることさえ稀になってしまった。

「魔物を退治するために、神々がそう何度も下界に下りて行くのも……切りがないからな。」

鵜も月も、長い年月の間に気付いていた。人間たちを救うには、神々が出て行って何かをしてやったり、施してやったりする方法ではだめなのだ。あくまでも、自分たちの力で立てるようにさせなければ、その場限りとなってしまう。

そのようなことを話し合っていると、二人の会話を遮るものが現れた。

「陛下の天馬だ……！」

二人は空を見上げる。天高く、一頭の両翼を持った白い生き物が飛翔しているのが見えた。

「鵜、急いで戻れ。そのことについてはまた、考えてみよう。」

あの天馬は天帝の愛馬。天帝が帰って来たに違いない。

鵜が地上で月と剣の稽古をしていた、等と知られれば、厄介なことになるかねない。

「わかった。兄さん、ありがとう。」

「お帰りなさいませ、父上。」

鵜を帰した月は、たった今天馬から降りたばかりの父に頭を下げ、挨拶した。

神王は神女と共に天地開闢の折に生まれ出で、次いで天界の神々を創造し、天帝として君臨するようになったという、この世で最も古い神である。生きている年数は三万年とも五万年とも言われているが、その姿は壮年期を少し過ぎた頃といったところで、少しだけ白髪の混じった髪に豊かな口髭、顎鬚を蓄えていた。

「うむ。今帰った。」

その声で、月は父の機嫌が良くないことに気付く。遊びから帰って来た時はいつもこの様子だった。

「…母上が後程お会いになりたいと、仰っていました。」

天帝は溜息をつく。

「…なに、また長い説教でも聞かされるだけだろうよ。日暮れに参ると申しておけ。」

「承知しました。」

天馬を連れて行くよう下人に指示をした後、天帝は月に向き直った。

「ところで月、先程…お前は誰と話をしていた？」

やはり、鵜のことに気付いているようだった。

「誰…と仰いますと？」

「…まあ良い。心得ているとは思いますが、余りあれに良くするな…良いな？」

そう言い残すと、天帝は天宮へと入って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5325ba/>

黒邪の啼哭（聖安戦記 外伝）

2012年1月14日21時47分発行